

まちの  
紹介

No.7

Tottori-city

用瀬町

Mochigase

もちがせの流しびな



流しびなの館



「文学の小径」の碑



赤波川「甌穴」



用瀬町は、町の中心を千代川が流れ自然環境に恵まれた、中国山地の山あいを開けた山紫水明の静かな町です。籠山、洗足山、三角山をはじめとして、用瀬の周囲を取り囲む標高500〜900メートルの山々には、自然が豊富に残り、四季折々の花や草木が私たちの目を楽しませてくれます。

町をゆったりと流れる千代川とその支流は独特の景観をつくり上げ、中津美溪谷に見られる大小の滝や、赤波川の水の流れが生み出した「甌穴」などに代表される美しい川の流れには、見るものをひきつける魅力があります。

また、用瀬町は、わが国の文壇で活躍した作家たちにゆかりのある土地で、町内には俳句や短歌などの37の碑があり、「文学の小径」として整備され、松尾芭蕉、種田山頭火、山口誓子などの碑が訪れた人を迎えてくれます。

江戸時代から引き継がれてきた伝統行事「流しびな」は、用瀬の風土や文化を代表する

ものとして、全国的にもその名を知られるようになりました。「流しびなの里」

用瀬」の象徴として、美しい山々の緑と千代川の水の美しさを背景に整備された「流しびなの館」には、連日多くの観光客が訪れます。

今年も「もちがせの流しびな」が、旧暦の桃の節句の4月11日に行われ、この日を楽しみにしていた多くのファンが全国から訪れました。用瀬に住む人々の想いや、子どもたちの折りを乗せた紙の雛がゆつくりと千代川を流れていきました。この日のために一つ一つていねいに作られた雛やそれを乗せるさん俵には、用瀬に伝わる伝統や文化がいっぱい詰まっています。

この流しびな行事が終わると、用瀬の里にも春の扉が開き、桜、菜の花、つつじなど色とりどりの花が一斉に山野をつつみ、春の饗宴が始まります。

